



2026 年度 第 24 回総会を開催

悪天候のためオンラインでの開催

9月20日(日)、2026年度通常総会を開催しました。台風による悪天候の影響で、急ぎょオンライン開催に変更しました。正会員153名のうち、事前表決者10名、表決委任者85名の計95名で定足数を満たし、斎藤利治さんを議長として議事に入りました。

第1号議案「2025年度事業報告」、第2号議案「2025年度決算報告・監査報告」、第3号議案「2026年度事業計画」、第4号議案「2026年度事業予算」は、いずれも承認されました。

2025年度は、おしゃべりの場の拡大をはじめ、Iメイト交流、交流会、奨学金事業などを実施し、新たにハノイ工科大学との交流も開始しました。2026年度は、会員コミュニケーションの一層の向上と、アジア風新聞のス



マホ版発行など広報の充実に取り組みます。

また、役員変更の報告があり、新たに千歩和人さん、小林玲子さんが理事に就任し、新体制がスタートしました。

続いて、2025年度Iメイト・オブ・ザ・

イヤーに選出された正会員浅山久美子さんに、加納啓良理事長から賞状が読み上げられ、オンライン授賞式が行われました。

総会後に予定していた金春安明氏の講演会「能楽650年の伝承とアジアの音楽文化」は、残念ながら中止となりました。

急な開催方法の変更にもかかわらず、ご理解、ご協力いただいた会員の皆様、関係者の皆様に、紙面をお借りして心より御礼申し上げます。

(事務局長 小関 高志)



まぼろしと消えた講演会

総会でお話してくださる講師を捜していると伺い、ふと頭に一人の同窓生が浮かんだ。能楽シテ方金春流八十世、金春安明氏だ。中高時代を通し、ユニークさで断トツ目立っていた。50年来お会いしていないし、忘却の彼方かもと覚悟しつつ、恐る恐るお伺いすると、なんと快諾して下さいました。小関事務局長とお宅にお邪魔し、世阿弥の時代から、親から子、師匠から弟子と綿々と伝えられ、650年継承されてきた能について、様々なお話を伺った。相変わらぬユニークな語り口で、流れる知識の数々、これは是非アジア風の会員、学生と共有したいと強く感じた。

今回の中止は誠に残念だが、また次の機会を狙いたいと思う。

(正会員 島村 美智)



能の魅力

八十の手習いで謡(うたい)の稽古を始めて8年。今も鎌倉能



舞台上で先生のお手本を真似して大声を出しています。謡は歌舞劇である能(のう)の「歌やセリフ」です。能は、役に扮して面をつけたシテ(主役)が、ワキ(相手役)の導きと囃子(はやし: 笛、小鼓、大鼓、太鼓の演奏)や地謡(じうたい: コーラス)に乗って舞い、謡って、物語が展開します。室町時代に観阿弥・世阿弥父子が大成させた能は、当時の台本が今も残り継承されてきた世界最古の舞台芸術です。「能楽(能と狂言)」としてユネスコ無形文化遺産第1号に登録されています。

笑いや風刺の狂言に比べると、能は悲劇的作品が多く、言葉もわかりにくいと敬遠されがちです。しかし、初めて能を観た人たちは「また観たい」と異口同音に言います。能舞台独特の緊張感と幽玄の美に魅了されるからでしょう。母の胎内で聞いた心音に似た囃子のテンポで心地よくまどろむ人もいます。日本最古の歌舞劇を「食わず嫌い」ではもったいない。ぜひ一度能楽堂に足を運んでみてください。

(正会員 古畑 仁一)

金春通りの奉納能に

悠久の時の流れの中で12月を1月に戻すのは、毎年やっぱり新鮮である。能楽金春流は650年の時の流れに八十一世までの宗家が誕生するたびに、新しく生まれ変わりが脈々と続いてきたのであろう。幻となった八十世宗家の演題は「能楽650年の伝承とアジアの音楽文化」。あの独特の抑揚と拍子がアジアの音楽とどのように融合するのか、ワクワクしながら待っていた。

650年からすると芥子粒にも満たない半世紀前、宝生流のお稽古に通った。足拍子が半拍遅い!謡の出だしがずれている!と言われながら、香里能楽堂で「小袖曾我」のツレを面も着けて演じさせて戴いたのは、今もまだ小さな誇りである。

宝生流の謡本や扇は金春通りにあったわんや書店から買っていた。金春屋敷があったことに由来する金春通りでは、能楽堂を飛び出て路上奉納能も行われていると言う。やはり、伝統を守りながら新しく生まれているのだと、能楽の魅力と未来を強く覚えた。来年の金春まつりの奉納能には行くことに決めた。

(正会員 原谷 洋美)



2026 年度役員とIメイト交流コーディネータ名簿

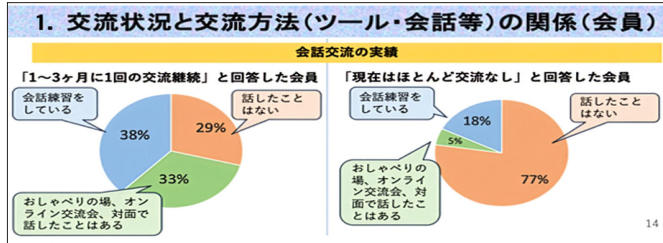
理事長 加納啓良
副理事長 奥山寿子
事務局長 小関高志
理事 武田 高 古海正子 三木京子
小林玲子(新任 貿易大学コーディネータ退任)
千歩和人(新任 タマサート大学コーディネータ兼任)
監事 大石 純 竹宮 聡
名誉顧問 上 高子

顧問 タサニー・メータピスット
Iメイト交流コーディネータ
横山茂明(清華大学担当)
山田琴恵(貿易大学担当)
鈴木一美(パジャジャラン大学担当)
小山昌久(架け橋グループ担当)
須賀智之(ハノイ工科大学担当)
理事退任 川口祐子 島村美智 西澤逸実

I メイト交流交歓会

7月12日、オンラインで開催されたIメイト交流交歓会には、新入会員4名を含む、日本人の会員35名が参加しました。

最初にコーディネータの小林玲子さん、鈴木一美さんから「Iメイト交流の始め方、Iメイト交流の楽しみ方、学生から連絡が来なくなったら、Iメイト交流の終了とその後」、事務局から「Iメイト交流実態調査の結果サマリー」、「小グループ会話交流の紹介」の話があり、その後、新入会員を囲んで会員同士の懇親会を行いました。各グループの主なコメントを紹介します。



- 昔は、メールによる日本語添削が主体だったが、現在は翻訳アプリやAIの発展により、むしろ文化交流や対面による会話練習に移っている。
- 会話練習時は、学生に話してもらい、日本人は多くを語らずに聞き役に徹するべき。
- 全てがうまく行くと思わずケセラ・セラでよい。
- 学生が様々な日本人の話し方に接するため、小グループのメンバーを変えるのも一案。

皆さんのご意見は、今後のIメイト交流・おしゃべりの場の運営や「Iメイト交流(会話)ガイドライン」へ反映していきたいと思っています。

2. Iメイト交流の楽しみ方/コーディネーターからのお願い等 学生から連絡が来なくなったら

鈴木さん

- 学校の試験(準備期間含む)や休暇に入ると、学生からの返信が遅くなる傾向があります
- メールを送っても、チャットを送っても返信がない場合
 - 1〜3か月程度経過したら、**ためらわずに**日本側コーディネータに連絡してください。
 - Iメイト交流実態調査(※)で「交流の状況」を報告し、学生の状況確認を依頼してください。
* Iメイト交流を行っている会員・学生は、必ず「Iメイト交流実態調査」に回答ください
- 交流校コーディネーター経由で、学生の状況を確認します
 - 「メールが届かない」など技術的な問題であれば、メールアドレスの変更等に対応します。
 - 何らかの理由で返信が滞っていたが、学生が交流の継続を希望する場合、再開します。
 - 学生が「交流の継続が難しい」と回答、または学生の状況が確認できない場合、交流を終了します。(無理をせず、次のマッチングに期待しましょう)

(理事 三木 京子)

新入会員歓迎 Zoom ミーティングを経て、7月12日のIメイト交流交歓会に参加させていただきました。最初は今後の期待と初めての活動に対する緊張感もありましたが、参加することでたくさんの情報をいただけましたので、とても良い経験になったと思います。



各大学のコーディネータの方からは、現在の活動状況やIメイト募集についてなど全体の詳しいお話を、小グループではIメイトとの交流を10年以上継続して携わっておいでの方々からの継続のための工夫について伺うことができました。このような良い機会を作って下さり有難うございました。

(正会員 太田 由美子)

2025年度Iメイト・オブ・ザ・イヤーのご紹介

Iメイト・オブ・ザ・イヤーに選ばれて



今年のIメイト・オブ・ザ・イヤーに選ばれたと理事の方から連絡を受け、最初は驚き、戸惑いました。数人のグループのおしゃべりの会を作り、さらにそれが新しいツールとして他の学生や他校にも広がっているから、との説明でした。

私はアジア風に入って6年、毎年学生一人ずつとメールを交換してきました。一昨年から始まった3年生の方は、メールを送るとすぐにほぼミスなく返事が返ってきました。話す方は?と尋ねると、自信がなく練習した

という。週1回のLINE会話を始めましたが、沈黙の時間が長く、書く力との大差に驚きました。

2回目に、日本に留学経験のある友達を加えたいとの提案があり、上級者の会話を聞くのも上達に欠かせないので、通信のツールも話題も彼女たちに任せ、ベトナム語と日本語の混じった賑やかなおしゃべりの会が始まりました。さらに彼女のIメイトなども加わり、日本のアニメや歌も教えてもらうこともあり、メールとは違ったナマの声が聞こえ、日常の生活が垣間見えます。

これらの経験から私自身にアジアの国や人に対する理解が深まり、新たな興味が広がりました。同時に学生たちの日本への興味に正しく応えられるように努める責任も感じています。

(正会員 浅山 久美子)

アジア風奨学生レポート

アジア風奨学基金は2018年に発足しましたが、第8回生は清華大学卒業の雷雅然さんに決定しました。

日本の立ち位置が少し揺らいでいる現在、雷雅然さんが、アジア風の活動を通じて得たものを、今後のアジアの交流に生かしていただけると期待しています。

雷さんは学部時代にも来日経験があり、Iメイトの川口祐子さんだけでなく、ほかの会員との交流もあり、日本での生活には全く不安はないと思いますが、交流会などで見かけたら気軽にお声かけをお願いします。(奨学生担当理事 奥山 寿子)

大学2年生の時にアジア風に参加して以来、多くの方と出会い、温かい思い出もたくさんできました。この秋、私はアジア風奨学生として東京大学大学院に進学します。再び皆さんに支えていただけることに、心より感謝しております。

私も、研究を通じて社会を少しでも良くし、誰かの支えになりたいと思っています。日本は、少子高齢化や経済の成熟に伴う課

題に早くから直面し、関連研究も豊富です。その経験に学び、東アジアの共通課題を考えたいと思い、留学を決めました。アジア風や名古屋大学への交換留学で出会った方々との交流も、海外で学ぶ不安を和らげてくれました。



学部時代は、日中韓とシンガポールの少子化対策に関する政策文書とSNS上の議論を定量的に比較し、政府と国民の関心にどのようなずれがあるのかを明らかにしました。その背景の一つとして、短期間に経済成長や都市化が進んだ「圧縮型近代化」が指摘されています。そのため、ヨーロッパの制度を東アジアにそのまま取り入れることは難しいと考えられます。

大学院では、この研究をさらに深め、日本と中国に焦点を当てたいです。少子化を手がかりに、雇用、住宅、働き方など、その背景にある社会課題を捉えていきたいです。そして、学術交流を通じて、両国の協力と互恵的な関係づくりに貢献できればと思っています。

(雷 雅然 東京大学大学院留学生 第8回アジア風奨学生)



架け橋グループIメイト院生の歓送交流会（7月25日）

猛暑の中、2024年組の帰国前歓送交流会を調布市にある神代植物公園・深大寺で行い、Iメイト院生の白君と張君、会員4名が参加しました。神代植物公園のバラ園にて真夏の陽射しをあび、深大寺そば屋にて名物の天ぷらそばとかき氷を楽しみながら両君

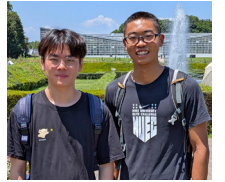


の無事の大学院修了と安全な帰国を祈念しました。日中の食文化やキャンパスライフの違い、将来の目標などを話題に日本語上手な二人との楽しい会話が続きました。

（交流コーディネーター 小山 昌久）

素敵な歓送会

皆様がとても親切に迎えてくださり、私たちがとても親しい活動の準備してくださったことに、心より感謝しています。特に深大寺でいただいたお蕎麦がとてもおいしく、印象に残りました。活動中はできるだけ日本語で皆様と交流し、日本での一年間に経験したことや楽しかった思い出についてもお話しすることができました。



＜白君と張君＞

今回の歓送会は、まもなく終わる私の留学生生活を締めくくる、素晴らしい思い出になりました。また機会があれば、ぜひこのような活動に参加したいと思います。

（清華大学大学院 東京科学大学留学生 張 雨橋

Iメイトは恩田 優さん）

夏のアジ風歌おう会（8月29日）

第2回目の歌おう会はカラオケスナックハーツ & ハーツで

1部おしゃべりとカラオケ会、2部の食事に分けて開催しました。1部17名2部10名、日本人会員、ベトナム及び中国人のOBOGや友人家族が参加して、賑やかに日本生活の感想を相互に交換し、それぞれの国の音楽も含めてカラオケを楽しみました。



その後に当店のママ手作りの食事をいただき、よもやま話で会話も弾み有意義な楽しい時間を過ごしました。次回は11月21日に開催します。

（正会員 林 孝男）

婚約式やお誕生日の乾杯も

第2回歌おう会の参加者は日本人10名、外国人7名。自己紹介の後、恒例のプレゼンは来日6年目のライ・ティ・ジュエンさんによる日本に住んでの感想。良いところはサービス、自然、礼儀正しさなど。悪い面は融通が利かないことと、外国人に対する法律が変わること。法律改訂については日本人からも、同様な懸念が示されました。順繰りにドラえもんや岬巡りなど、お得意の歌を披露しました。ドウ・テイ・トアンさんの婚約式や、林孝男さんのお誕生日の乾杯でも盛り上り楽しいひと時でした。



（賛助会員 藤原 玲子）

故中村一郎さんの墓参

去る8月11日、賛助会員OGのライ・ティ・ジュエンさんと私は、故中村一郎さん（理事、監事、顧問）の一周忌墓参のために浜松駅に降り立った。改札口でお嬢さんの亜希子さんと落ち合い、徒歩で墓前へ。そこは、徳川家康の正妻・築山殿の菩提寺・西来院の境内。江戸時代の豪商だった中村家は、築山殿の出産に関わる秘めた逸話があったとか。現役引退後、一郎さんはご家族の住む東京と故郷である浜松の地の二拠点生活をして、ジュエンさんや他のIメイト学生をその地へたびたび招待された由。



（名誉顧問 上 高子）

父のライフワークだった「アジ風」

残暑厳しい8月、上さんとジュエンさんが父の墓参りに来てくださいました。久々の再会でしたが、お二人とも相変わらずお元気で、父の馴染みの地と一緒に巡ることができました。多様な文化や発見に出会える海外が好きで、駐在時や退職後も家族を多くの国へ連れて行ってくれた父でした。



アジアの未来を担う優秀な学生の皆さんと出会えた「アジアの新しい風」での活動は、人生を豊かにするライフワークだったと感じております。生前の交流、そして今も父を気にかけてくださる皆さまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

（正会員 中村 亜希子）

会員紹介

谷口 由紀子さん

谷口由紀子さんは生まれは広島ですが、幼少の頃からずっと東京都内の官舎で育ちました。ワンパク坊主どもと走り回ったりすることはなく、5歳の頃からはいつも静かにピアノを弾く女の子でした。

ピアノの道に進みたいという気持ちもあったのですが、進んだ都立駒場高校には当時音楽科があり、生徒達のレベルが余りに高いので、とても太刀打ちは無理と悟り、大学では英語を専門に学ぶことにしました。ICU(国際基督教大学)はアメリカ系のミッションスクールで、英語を学ぶには絶好の大学でした。合唱団に入りましたが、今もその大学OBの合唱団で活動を続け、2000年にはウクライナ、2007年にはグルジアにも演奏旅行に出掛けました。近々演奏会が東京で開かれるので練習に勤しんでおられるそうです。

アジ風にはご主人の浩章さんが、設立者で現名誉顧問の上高子さんと兵庫県丹波市の柏原高校の同級生と言う縁で入会され、

由紀子さんもご主人に誘われて入会されました。それからもう20年にもなります。これまでにタマサート大学6人、清華大学5人、ハノイ貿易大学3人のIメイトと交流を続けてこられました。ハノイ貿易大学のIメイトが大阪に留学中に開かれたアジ風西日本地区交流会に東京から出掛け、その後自宅に呼んだり、渋谷のスクランブル交差点と一緒に歩いたり交流が深まりました。



最近始まった「おしゃべりの会」は日本人2人、Iメイト2人といった小規模のネットミーティングですが、気楽に会えるので、とても楽しい、きっとIメイトも楽しんでくれているのではないかとお話しいただきました。

今アジ風には街歩きの会、山歩きの会、カラオケの会など様々な同好活動が広がっていますが、留学中のIメイト学生達と博物館巡りなどにも一緒にいきたいなあと思いつきながら仰いました。

インタビュー：園田 成和

アジ風がつなぐ新しい交流の形

7月に清華大学の陳朝輝先生と日本語科の学生がタイのタマサート大学を訪問されました。現在アジ風は会員と5大学と架け橋グループの学生との交流が活発に行われていますが、今回の2大学の交流をきっかけに、各国の大学生が日本語を介して意見を述べあえる場をアジ風が提案できればと思っています。新しい交流への発展が期待されます。

(副理事長 奥山 寿子)

タマサート大学訪問記

7月、私は清華大学日本語専攻の一年生10名を率い、タイ



＜前列左から
タサニー先生、陳先生、シリワン先生＞

のタマサート大学日本語学科及び国際文化学院を訪問し、アジア若者同士の交流を实践する貴重な機会を得ました。アジ風は日本語を通じてアジア各国の若者をつなぎ、相互理解と友好を育むことを理念としています。今回のタイ訪

問は、まさにアジ風の理念を現場で体現する実践となりました。

タマサート大学ではシリワン先生、タサニー先生に多大なご配慮と温かなおもてなしを賜りました。両先生の誠実で細やかな対応により、短期間の訪問ながら非常に実り多き交流となり、学生たちも心から良い体験ができたと感じております。

今回最も感慨深かったのは、中国とタイの学生が共通言語として日本語を用い、対話と交流を深めたことです。異なる母国語、異なる文化を持つ両国の若者が、第三の言語である日本語を介して心を通わせる姿は、非常に興味深い光景でした。言語は単なる技能ではなく、人と人、国と国をつなぐ共生のツールであり、アジアの相互友好を育む原点であることを改めて悟りました。

日本語の学びをきっかけに生まれた今回のご縁は、まさにアジ風が掲げる理念の結晶です。今後もこの交流の輪を絶やさず、言語の力でアジア各地の友好の風をさらに広げていきたいと願っております。

(清華大学日本語科副教授 陳 朝輝)

言葉を通じてつながる楽しさ

今回のタイ訪問では、カンチャナブリで泰緬鉄道の博物館や戦争墓地を見学し、バンコクではチュラロンコン大学とタマサート大学を訪れた。特に印象深かったのはタマサート大学だ。緑豊かなキャンパスと充実した施設に驚いた。先生方は温かく迎え、大学の歴史や日本との関わりを丁寧に紹介してくださった。日本の支援で建てられた日本研究センターの存在からも、両国の交流の深さを感じた。

日本語と中国語を学ぶ学生たちは勉強熱心で親しみやすく、アニメの話ですぐに打ち解けた。この訪問を通じて、自分の先入観に気づき、言葉を通じてつながる楽しさを実感した。

(清華大学 霍 皓森)

アジ風がつなぐ交流

日本語を学ぶ学生にとって、学んだ日本語で日本人と話してみたいという思いは、ごく自然なものだと思います。これまでのIメイト交流は、タイ、中国、インドネシア、ベトナムなど、アジア各国の日本語学習者が日本語を共通語として交流してきました。日本語は、日本人と話すためだけではなく、国や母語を越えて人と人をつなぐ言葉にもなっているのです。

そして今回、Iメイトをきっかけに生まれたつながりが、思いがけない形でさらに広がりました。清華大学の先生と学生の皆さんがタマサート大学を訪問され、これまでの人と人とのつながりから、教員や学部、そして大学同士の新たな交流が生まれました。中国語を話せない私も、皆さんと日本語で直接話し、笑い、さまざまなことを伝え合う中で、日本語がアジアの人々をつなぐ「共通語」になっていることを改めて実感しました。



＜タマサート大学訪問の清華大学メンバー＞

一つの小さなつながりが、思いがけない出会いを生み、また次のつながりへと広がっていく。そのきっかけを運んでくれた「アジアの新しい風」に感謝するとともに、これからこの風がどんな新しい出会いを運んでくれるのか、楽しみにしています。

(タマサート大学日本語科准教授 シリワン・ムンタラウォン)

タイの多様な外国語教育

チュラロンコン大学では孔子学院を見学し、中泰両国が協力し中国語教育と文化交流を進める様子を目の当たりにした。タマサート大学では昼敷きの日本語教室を参観した。日本語学科の学生が自主学習を行い、日本文化を体感しながら言語を学ぶ環境があった。

両校の学風には違いが見られる。チュラロンコン大学は学術研究と公式な国際協力を重視し、タマサート大学は学生主体の学習と人文教育を大切にしている。今回の見学を通じ、タイの外国語教育の多様性を理解し、戦後タイ社会の対中・対日認識の一端をうかがうことができた。

(清華大学 胡 一鑫)

今後の行事予定

<http://www.npo-asia.org>
new-wind2006@npo-asia.org

- 10月17日 山歩きの会
- 10月30日～11月1日 清華大学訪問
- 11月14日 西日本交流会
- 11月21日 第3回「歌おう会」
- 11月28日 街歩きの会
- 日程未定 架け橋グループ歓迎交流会
- 2027年2月 新春交流会 予定

・・・編集後記・・・

総会や交流会で訪れる市ヶ谷 JICA 地球ひろば。夏休みのある日、地元子ども会行事の行く先はその地球ひろばだった。小中学生30人が5班に分かれ、1Fの体験ゾーン、2Fではワークショップ、アジ風でも好評なエスニック風弁当を体験した。

教育や災害復興、難民支援などをパネルを使いスタンプラリーもして、世界の課題を身近に感じ触れあう試みが面白い。ワークショップでは海外協力隊員からビデオやQ&Aを駆使したユニークな体験談を聞く。子どもたちは臆することなく活発に生き生きと過ごし、日本と発展途上国の違いを知り、草の根交流の一步を踏み出したように思う。

万葉集巻20に「父母がこの花なら筑紫の国まで持っていくのに」と詠んだ防人の歌がある。皆さんも地球ひろばを訪れた折には、平和を希求するアジ風の理念を片手にちょっと寄り道してはいかがでしょう。

(原谷 洋美)